

どんな職業か

自然素材を使用した塗り壁は吸放湿性・断熱性・防火性など優れた機能に富み、建築仕上げには欠かせないが、この壁を塗りあげるのが左官の仕事である。

作業は、まず材料を練りませ、それを施工場所まで運び、最後に壁面への塗付け施工を行う。塗付け施工では、下地になる土やセメントモルタルなどの素材を塗り、中塗りを行ってムラ直しをしてから、上塗りによって最終的な表面仕上げを施すのが一般的な施工方法である。下地の塗り方に欠陥があると、壁がはがれたり、ひび割れたりしてしまうため、下地を塗るときには十分に注意する。

最近では壁の種類が増え、従来からのしっくい壁や防火用土蔵造りに加えて、モルタル、石こうプラスター、ドロマイトプラスターや合成樹脂系の塗り壁、薄塗り工法などが出現し、素材も工法も多様化している。またそれに伴い、扱う道具についても、従来から使われている「こて」だけでなく、はけ、ローラー、吹付機械、ミキサー、モルタルポンプ、ウィンチ、ベルトコンベアーなど多種多様になり、最近では、床用ロボットも開発されている。

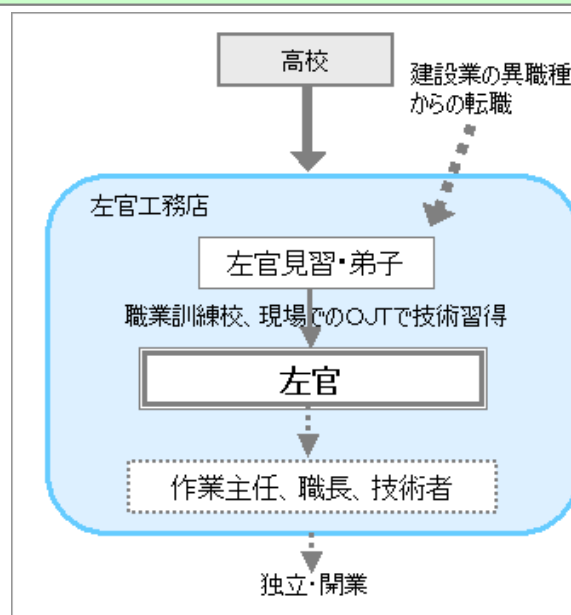
素材や工法、扱う道具は多様になってきているが、基本的に手作業で仕上げていくという点では従来と変わらないため、他の建材では得られない味わいや多彩さがあり、左官のつくる美しい壁が見直されている。

就くには

入職にあたって、学歴や資格は特に必要ない。かつては親方に弟子入りして技術を習得したが、現在では入職後に職業訓練校で学び、現場で実地作業をしながら技術を身に付けていくケースが一般的である。

入職後は、見習工から左官技能者、現場作業の指揮監督を行う作業主任、作業・管理両面の実質的責任者である職長へと昇進していくのが一般的なコースである。職長などとして建設作業所で指揮をしていくには、左官の技術だけでなく安全面での指導管理ができる資格を持つ必要もある。また、技術次第で技能者から技術者へ職種転換したり、独立開業することもできる。

厚生労働省が実施する技能検定に「左官技能士」があり、資格を取得すると技術力の証明として評価される。



労働条件の特徴

職場は、野丁場（のちょうば：主としてビル建築の左官工事）と町場（まちば：主として一般住宅の左官工事）に区分するのが一般的であり、野丁場で働いている左官が約20%、町場が約80%の構成となっている。

被雇用者がほぼ半数を占めているが、この職種の特色として、腕を頼りに工事の一部を請け負って自分で作業をする、いわゆる一人親方も4人に1人ぐらいの割合を占めている。また、子が親の後継者となるということで、家族従業員もかなりいるのが特徴である。

給与は日給月給制が多いが、仕事の出来高に応じて給与が決まる出来高払いもあり、その場合は技能の高い人は高給となるかわり、高齢になると所得が低下する傾向がある。日給月給の場合にも、技能程度によって給与に差があり、年功序列というよりは能力に重点が置かれる。

労働時間はおおむね1日8時間で、日曜・祝日は休日となるのが一般的であるが、工期の都合や天候によって、超過勤務や日曜出勤して休日を振り替える場合もある。

労働需要の見通しについてはほぼ横ばいと見られている。平均年齢が高くなってきているので、若年者をどう確保していくかが大きな課題となっており、魅力的な職場にするために福利厚生制度の充実や退職金制度の確立、労働環境の改善などが進められている。

参考情報

関連団体 社団法人 日本左官業組合連合会
<http://www.nissaren.or.jp>

関連資格 左官技能士 建築施工管理技士